

『中江藤樹 村の先生』 Part 1

今から百年ほど前、明治時代に日本の知識人が、日本の文化や精神を「英語」で西洋に紹介した代表的な三冊の本があります。

一つは、新渡戸稲造の「武士道」と内村鑑三の「代表的日本人」そして岡倉天心の「茶の本」です。内村鑑三の「代表的日本人」に登場する人物には、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、日蓮上人と中江藤樹があります。

この中で、中江藤樹については、私は全く知らない人物だったので、興味深く読みました。

時代は1608年、江戸時代の始まる前に、日本がかつて生んだなかでも聖人中の聖人で、もっとも進歩的な思想家が近江に生まれました、中江藤樹です。

十一歳の時、儒教の「大学」の一節に感銘を受けて生涯の生き方を決めました。

その一節が「天使から庶民にいたるまで、人の第一の目的はその身を修めることにある」という一文です。少年は、自分も聖人になることを誓ったのです。日中は武芸に励み、夜間に書物を読む生活を続けました。28歳の時に、村に私塾を開きます。藤樹の教えには、一種独特な点がひとつありました。

生徒に関して、徳と品格を最重要視し、学問や学識はほとんど問題にしなかったのです。

村の出来事にいつも関心を持ち、裁きの場に引き出されたある村人のための取りなしをしたりしていました。自分を乗せた駕籠かきにまで「人の道」を説いていた、といった藤樹の話が、村人の間で語り継がれています。

そして、藤樹は数年間、無名の人生を淡々と送っていました。名が知れることを彼は何よりも嫌っていたからです。しかし、ある出来事がきっかけで、藤樹は表に出ることになったのです。

ある若侍が、岡山を発ち、この国の聖人を探し求める旅に出ました。

聖人に師事出来れば、と考えたのです。江戸に向かう途中、近江の宿で一夜を過ごしているときに隣の部屋から旅人二人の会話が聞こえてきたのです。

二人は知り合ったばかりのようで、話し声が聞こえてきました。

「殿様の命で江戸へ上り、金数百両を託されて帰る途中、それまで肌身離さず持ち歩いていたこの金を、この村についた日だけ、借りた馬の鞍にくくりつけておいたのだ。宿に着き、鞍の大事なものをすっかり忘れて、馬方と馬を帰らせてしまった後、大変なことをしてしまったと気づいたのだ。

馬方の名も分からず探し出すのはとても無理で、釈明の道はただ一つしか残っていなかった。切腹だけ。苦悩に打ちひしがれていたとき、真夜中近くに、宿の戸を誰かが力いっぱい叩いているのが聞こえ、するとまもなく人がやってきて、人夫姿の男が訪ねてきたと言うので会ってみると、あの馬方だった」「お侍様、鞍に大事なものをお忘れのようです。

家に帰るまで気づきません、お返しするために戻って参りました。

さあ、お納めください」と金袋を目の前に置いたのだ。わしは、もちろん喜んだが、ふと我に返り「おまえは命の恩人である、この金の四分の一を受け取ってもらいたい。新たな命の親も同然だから」というと「そのようなものをいただく資格はございません。これはお侍さまのものですから」と言い、目の前の金に頑として触れようとしない。

では、十両だけでも、せめて五両、二両、しまいには一両だけでもなんとか受け取ってもらおうとしたが、だめだった。馬方がついに口を開いた。「それでは、貧乏暮らしをしておりますため、わらじ代として四文だけお願いします。家から四里の道を歩いてきましたので」という。

わしが「なぜ、それほどまでに無欲で正直で誠実なのか、どうかわけを聞かせてもらいたい。」と言うと

「わたしが住んでおります小川村に、中江藤樹という方がおられます。この先生が、わたしどもにこうしたことを教えてください。先生は、利を得ることが人生の目的ではなく、誠実、正義、人の道が目的であると。わたしどもはみな、この先生のお話をよく聞き、日々その教えに従って暮らしているだけでございます」

若侍はふすま越しにこの話を漏れ聞いて、膝を打って心の中で叫びます。「この人物こそ、探し求めていた聖人だ。明日、早々訪ねて行って、弟子にさせていただくのだ。」

